

「戸数・家数から判る邪馬台国」

菊地昌美

魏志倭人伝には、

「対馬国は千余戸。

壱岐国は三千許家。

末廬国は四千余戸。

伊都国は千余戸。

奴国は二万余戸。

不弥国は千余家。

投馬国は五万余戸。

邪馬台国は七万余戸」とあります。

この記述から、魏志倭人伝の人口を考えるもとなる表現は、戸数だけでなく、家数があることがわかります。

ところで、『魏志韓伝』には、

「韓人……居処作草屋土室、形如冢、其戸在上、举家共在中」とありますので、その戸は数軒の家からなっていたと考えられます。

また、『魏志韓伝』に、

「弁・辰韓合二十四国、大国四五千家、小国六七百家、総四五万戸。」(弁・辰韓合二十四国……総四五万戸)とあります。

24国で45000戸としますと、総45000戸÷24国=1875戸となり、1国平均は1900戸弱です。

「其戸在上、举家共在中」と、「共」とありますので、戸は数軒の家からなっていたと考えられますから

1戸=3家と仮にします。

大国で1国4500家÷3家=1500戸となります。

総じて45000戸÷大国1500戸=30国ですから、1500戸の国が30国あることになり、

史料の「弁・辰韓合二十四国……総四五万戸」の24国を大国だけで超えてしまいますので、

1戸=3家はあり得ません。

そこで1戸=2家とします。

大国は四五千家ですから、1国4500家÷2家=2250戸となり、小国は六七百家ですから、650家÷2家=325戸となります。

大国数をX、小国数をYとすると

$X+Y=24$ 国から、 $X=24-Y$

$X \times 2250 \text{戸} + Y \times 325 \text{戸} = 45000 \text{戸}$

$X=24-Y$ から

$$(24\text{国}-Y)\times 2250+325Y=45000$$

$$24\times 2250-2250Y+325Y=45000$$

$$54000-1925Y=45000$$

$$9000=1925Y$$

$Y=4.6753\cdots\cdots$ となり、

Yは5国となります。

小国が5国ですから、大国は19国です。

このように考えると、戸と家の関係は、平均して、1戸は2家と考えられます。

戸と家の関係が、平均して、1戸は2家と考えられますので、それに基づいて邪馬台国関係の戸数を計算します。

奴国を除いて、戸と表現されている国の対馬国、末廬国、伊都国、の戸数は、6千戸。

1国平均は2千戸となります。

1戸=2家とすると、

対馬国は千余戸。

壱岐国は三千許家——→1500戸

末廬国は四千余戸。

伊都国は千余戸。

奴国は二万余戸。

不弥国は千余家——→500戸

投馬国は五万余戸

邪馬台国は七万余戸

このうち、奴国を除く、対馬国、壱岐国、末廬国、伊都国、不弥国の戸数は、8千戸。

1国平均は、1600戸。

1国平均は1600戸か、2000戸。

ところで、「許家」と「余戸」という表現がありますので、これについても考える必要があります。

「許」が使われているのは、『魏志倭人伝』の「至一大(支)国。官亦曰卑狗。副曰卑奴母離。方可三百里。多竹木叢林。有三千許家」です。

「許」は、上下に幅を持たせて、「おおよそ、そのくらい」ですから、「三千許家」は、「おおよそ三千家前後くらい」です。

それに対して、「余」は、「余分、はみでた端数」です。つまり端数があるということです。

「余」は、『魏志倭人伝』の記述の中に、残余人、五尺余、十余日、二十余日、五十余日、百余人、百余歩、百余国、四百余里、千余人、千有余人、千余里、千余戸、二千余里、二千余戸、四千余戸、五千余里、七千余里、万余家、二万余戸、五万余戸、七万余戸、十万余戸、などと表現されています。

『魏志韓伝』の馬韓の「凡五十余国」が「54国」で余が約1割です。

『漢書地理志』に「夫れ楽浪海中に倭人あり、分かれて百余国と為る。歳時を以て来たり献見すと云ふ」とある百余国は、『宋書倭国伝』の「東は毛人を征すること五十五国、西は衆夷を服すること六十六国」と表現され、平定した倭国を含めると、122国になり、

余が2割強です。

これらの使用例から「五十余」は「五十一～五十九」までの「五十台」のような使い方をしていると考えられます。

つまり、筆頭桁数台の余りの最小から最大までも含む可能性すらあると云うことです。

少なくとも、1割2割の「余」があるのは当然のように考えられます。

仮に2割の「余」があるとする、

対馬国は千余戸→1200戸

老岐国は三千許家→1500戸

末廬国は四千余戸→4800戸

伊都国は千余戸→1200戸

不弥国は千余家→600戸

戸数の総計9300戸、5国で割ると、

平均は1860戸です。

このことから、平均1860余戸と、2000余戸は、

それほどの差がないので、2000余戸と考えて論を進めてもよいと思います。

戸数から考える邪馬台国

ところで、『魏志倭人伝』には

「末廬国……東南陸行五百里、到伊都国」

とありますので、末廬国と伊都国の間には、国が無かったことが分かります。

九州の地図を思い浮かべて、末廬国と伊都国を置くと、「末廬国は四千余戸。伊都国は千余戸。奴国は二万余戸。」の関係から、奴国の範囲はどのようになるでしょうか。

「末廬国の四千余戸の5倍の二万余戸。伊都国の千余戸の20倍の二万余戸。」

奴国は九州北半の末廬国・伊都国・不弥国を除く九州のほとんどの地域を支配していたと考えられないでしょうか。

また、『魏志倭人伝』には、

「投馬国は五万余戸」

「邪馬台国は七万余戸」とあります。

このままでは、邪馬台国九州説は成り立ちません。

そこで、邪馬台国九州説の人の中には、2万戸・5万戸・7万戸は、それまで出てきた戸数の総計・累計であるとする人がいます。

しかし、この考え方は、『魏志韓伝』で「馬韓は……総じて十余万戸」、「弁辰韓……総じて四・五万戸」と、総計の場合は「総」という別の表現をしていますので、成り立ちません。

方角の訂正

ところで、『魏志韓伝』に「州胡有り馬韓の西、海中の大島の上に在り」とあります。なんと州胡、つまり済州島が馬韓(後の百濟)の西にあると言っているのです。実際はほぼ南に在ります。

このように陳寿は半島内陸部を離れると途端に方角を間違えて考えていたのです。

この「南を西」と、時計回りに90° 足す間違い方から、方角を訂正すると、南とあるのは90° 引いて東、東とあるのは90° 引いて北、北とあるのは90° 引いて西となります。

つまり、『魏志倭人伝』の「不弥国……南投馬国……南邪馬台国……南狗奴国」は「不弥国……東投馬国……東邪馬台国……東狗奴国」となります。

また『後漢書東夷伝』の記述は『魏志倭人伝』の誤りを、『魏志倭人伝』を出さずに訂正しています。

その『魏志倭人伝』を訂正した方角の記述が、『魏志倭人伝』で「其の北岸狗邪韓国に到る」とあったものを、『後漢書東夷伝』で、「其の西北界拘邪韓国を去ること」と変更しています。また、『魏志倭人伝』で「其南狗奴国有り」とあったものを、『後漢書東夷伝』で「女王國より東度海千餘里拘奴國に至る」と南を東に訂正しています。その訂正の最たるものが、「倭奴國……、倭國之極南界也」と『魏志倭人伝』の「不弥国……南投馬国……南邪馬台国……南狗奴国」を訂正した部分です。

このような『後漢書東夷伝』による『魏志倭人伝』の訂正から何が判るか考えます。

まず「其の西北界拘邪韓国」から、倭国は狗邪韓国の東南にあることとなります。狗邪韓国は今の釜山のあたりを中心とする国と考えられます。とすると倭国は、東南の中国地方・四国地方を中心とする、九州から近畿地方などを含む地域であったことになるのではないのでしょうか。また、「西北界拘邪韓国」は、倭国の中心が狗邪韓国の北でもなく、西でもなく、東で南にあることとなります。

次に、『後漢書東夷伝』では、奴国が極南界で、『魏志倭人伝』の、「伊都国の南に奴国、奴国の東に不彌国、不彌国の南に投馬国、投馬国の南に邪馬台国」を訂正しています。

また、狗奴国との方角も、「女王國東……拘奴國に至る」とあり、『魏志倭人伝』の「南に狗奴国有り」を否定しています。このように、狗奴国は邪馬台国の南ではなく、東にあったと検証をしています。

方角の誤りの訂正と一緒に考えれば、投馬国は九州の東にある五万戸の国。

邪馬台国は、さらに投馬国の東にある七万戸の国です。

ここからも、邪馬台国は大和国と言えらると思います。

邪馬台国の人口推計

邪馬台国の戸数に関する考察の次は人口の推計を行いたいと思います。

『魏志倭人伝』には、

「屋室有り、父母兄弟臥息処を異にす」

「其の会堂坐起、父子男女別無し」

「大人皆四五婦、下戸或いは二三婦」

「其の法を犯すや、其の軽き者は其の妻子を没し、重き者は其の門戸及び宗族を滅す」とあります。

1 家族は何人位が平均だったのでしょうか。

「大人皆四五婦、下戸或いは二三婦」とあります。

下戸の中にも2・3婦をもっている場合があります。

その平均の複数の妻達と、その子達で構成される戸は、何人くらいで構成されていたのでしょうか。

いろいろな国や、澤田吾一氏の「奈良朝時代民政経済の数的研究」から、複数の妻達と、その子達で構成される家族数の例を調べてみますと。妻が2・3人の場合は1家族十数人となる例が多いようです。

そこで、1戸を2家とすると、

1戸平均10人位となります。

すると、

対馬国の千戸は1万人。

壱岐国の三千家は1500戸で1万5000人。

末廬國の四千戸は4万人。

伊都国の千戸は1万人。

奴国の二万戸は20万人。

不弥国の千家は500戸で5000人。

投馬国は五万戸で50万人。

邪馬台国は七万戸で70万人。

邪馬台国関係の8国の、総戸数は14万8000戸。

1戸10人とする148万人。

ところで、日本の人口の推移ですが、大体の人口は、

500年頃、500万人。

700年頃、600万人。

とすると、陳寿（233～297）の編纂した『魏志倭人伝』の記述された3世紀後半頃の日本の人口はどの位でしょうか。

300万人位を考えてよいと思います。

九州にあったのは、対馬・壱岐・末廬・伊都・奴・不弥国だけ。

国の大きさは、その戸数に準じて考えてよいと思います。

こうなると、

五万戸の投馬国は中国地方と近畿地方の一部をまとめた国。

七万戸の邪馬台国は近畿地方と、中部地方の一部をまとめた国。

そして、狗奴国は関東地方を中心とし中部地方の一部を含む東国をまとめた国だったと考えたらどうでしょうか。

この狗奴国は、『後漢書東夷伝』の「自女王國東度海千餘里至拘奴國、雖皆倭種、而不屬女王」の記述から、「皆」ですから、一つではないということです。狗奴国は「皆」で成り立っているということです。

これは明らかに、狗奴国が「小国の連合体」だったということを表現しています。

邪馬台国が29国の連合国家の大倭王であったと同様に、狗奴国もまた「小国の連合体」の首長だったということです。

倭国全体の人口推計

『魏志倭人伝』には、

「自女王国以北、其戸数道里可得略載、其余旁国遠絶、不可得詳」（女王国より北の国は、その戸数や道筋と里数を略載出来るが、その他の国々は、遠く隔たっているので、詳しくすることが出来ない。）

という文が在りますので、余旁の21の国の戸数は数えられていないことが分かります。

そうだとすると、これらの国の戸数も推測する必要があります。

戸数を表記した対馬国から邪馬台国に対して、余旁の国の戸数はどの位だったのでしょうか。

「邪馬台国の戸数」の結論から、1国平均は2千戸となります。

すると21国で4万2千戸。1戸10人平均として、42万人。

対馬国から邪馬台国までの8国の148万人と合わせると、邪馬台国関係29国の推測合計190万人。

これに狗奴国の戸数・人口と、国をつくっていない地域の人口を推測して合わせたらどの位になるでしょうか。

300万人近くなるのではと推測します

奈良時代の人口推定から

ところで、「奈良朝時代民政経済の数的研究」という、澤田吾一氏の本の中に、「諸国の郷別人口附、諸国人口表・郷数表・田積表」という一節があり、8世紀の中頃の諸国の人口を推定して表にしています。

これによると、賤民などをのぞいた人口は、

地方	人 口	地方/全体%
東北	266,300	5
関東	970,850	18
中部	1,059,550	20
近畿	1,205,450	22
中国	851,600	16
四国	334,950	6
九州	697,450	13
全体	5,386,150	100

となります。

ところで、『魏志倭人伝』の戸数と人口の推測は、1戸10人として、

		戸 数	人 口
奴国など	九州地方	28,000	280,000
投馬国	中国地方中心	50,000	500,000
邪馬台国	近畿地方と中部地方の一部	70,000	700,000
余旁の国	四国地方、その他	(42,000)	420,000
計			1,900,000

邪馬台国九州説をとれば、狗奴国まで九州になります。

その人口も加えて考えたとき、190万人+狗奴国人口は、なんと500年後の奈良時代の九州地方の人口約70万人の3倍以上となってしまいます。

このような時代を逆転させる説は成り立ちませんので、邪馬台国九州説はあり得ないと思います。

結論として、

五万戸の投馬国は中国地方を中心に周辺の一部をまとめた国。

七万戸の邪馬台国は近畿地方と、中部地方の一部をまとめた国。

そして、狗奴国は関東地方を中心に中部地方の一部など東国をまとめた国だったと考えられると思います。

つまり、「邪馬台国は大和国」になると思います。

この文は拙著「改訂新版 邪馬台国は大和国」の一部分の要約です。